「サラマンカ日本研究事情ご報告」『日文研』29号、2003年3月31日、43-54頁

サラマンカ日本研究事情ご報告

稲賀繁美

国際交流基金からの要請により、西暦二〇〇二年十一月初旬から年末まで、スペインの古都サラマンカで学部水準の日本文化論の講義に携わると同時に、来年度発足予定の日本研究を含む東洋学研究学科（文献学部に所属の予定）の立ち上げ助言者という名目で滞在した。トルメス川のほとりに築かれた一三世紀初頭以来の伝統ある大学都市にして、西暦二〇〇二年には欧州の文化首都に選ばれた、旧カステージャ地方の中心都市、サラマンカに関しては、別途いくつかの紀行文を執筆したので、ここでは繰り返さない。以下、日本関係の教育の研究に限定して報告する。

スペインにおける日本研究といえば、事情通の人々はその致命的な遅れを繰り返して嘆いてきた。クロサワの『七人のサムライ』と、もう二十年前のジェイムズ・クラヴェルの『ショーグン』から、日本認識は一歩も進んでいない。

要するにスペイン人にとって日本なんて、どうでもよいんですからね――そうした投げやりな対応、あるいは突き放した評価が、依然として支配的だ。九八年にはサラマンカ旧市街のサン・ボール宮に通称、日西センター（Centro cultural Hispano-Japónes）が、大学の付属機関として開設された。スペイン進出日本企業の多大なる出資と援助による改修工事の賜物である。その展示会場は「美智子様ホール」と名付けられている。ここにも明らかなとおり、事業の背後には、皇室のいささか例外的といってよい関与がある。今日に至るまで、センターの運営には、林屋栄吉元駐西大使と、日本サラマンカ大学友の会による献身的な支援が、不可欠であった。今年実現した図書室への一千八百冊にのぼる図書寄贈を含め、そのご尽力には、是非一言触れておく必要がある。

十一月に赴任して、さて日本文化論の講義なるものを拝命してみると、正直申して唖然とさせられる状況ばかりが眼前に拡がった。交流基金からは、日本文化あるいは美術に関して十回程度の講義を二カ月ですればよい、といった説明を得ていたが、着任一月まえになって、日西センターの現地職員、矢島信夫氏とようやく連絡が取れてみると、一学期分、四十五時間の授業をこなすことが、担当学部の規定であるという。十一月五日火曜日にマドリッドに到着、翌日水曜日、日本大使館で、大使から直々の説明を得たのち、木曜日の午後に現地着任。その翌日、八日の金曜日、センターの講堂で、登録を済ませた五十人ほどの学生と打ち合わせに臨んだが、当方が（下手くそなスペイン語で）、ワタシ・すぺいんゴアンマリ、ハナセマセン、予告のとおり原則として英語で授業します、と宣言するや、そんなことは聞いていない、と猛然たる抗議の声があがり、それは次の週には学部の教務担当副学長に届き、副学長を通じて、センター長に不平が連絡されてきた。前以て印刷されていた授業要領に、「基礎的英語力を必要とする」との規定が明文化されていたので、幸いというべきか、所長の責任問題は回避されたが、そんな責任問題は、授業現場の状況を解決するものでは、まったくない。

そもそも「基礎的な英語力」によって可能な講義とは何なのか。美術史の授業なのだから、映像資料に頼れば基礎的な英語力で構わない、というのが、英文学科に属するセンター長の言い分である。いまさら現地に来てから、そんな文章を拝謁したところで、反論とてむなしいが、専門志向の強い大先生なら、この一言で、我が学問領域に対する認識不足と蔑

視に我慢ならん、といって席を蹴って帰国してしまう、という光景とても想像に難くない。おまけに、日本出発の時点では、当方の受け持ちは、日本美術史概論などではなかった。日欧文化交渉史に関して十回ほどの講演を、という建前であったから、その内容目次を国際交流基金を窓口にまえもって送付しておいたが、当地にきてみると、その原稿は締め切りに間に合わなかったとのことで、矢島さんの筆による、スペイン語の日本美術史概要が、学生向きのシラバスには記載されている。こうなっては、当方が準備してきた講義で済ますわけには、とても参らない。

加えて現地で学生諸君の都合を尋ねてみると、教務側は四十五時間相当分の受講なくしては単位認定不可というのにたいして、学生諸君の日程のほうは、もはやどうみても四十五時間分の授業には対応不能。しかたなく、水曜日、木曜日、金曜日の夜七時から二時間のセミナーを三本、それに加えて金曜日の午前九時より午後二時までの集中講義を立てることにした。セミナー二本と講義とを組み合わせると、かろうじて四十五時間という、学部側が指定した時間数を満たしていることになる。だがこの時間割で実際に講義するのが、狂気の沙汰でしかないことは、スペインの生活時間をご存じの方々には、あらためて説明するまでもあるまい。木曜日など、授業が終わるとすでに夜の九時。コピーなどはもはやできないが、翌日は朝九時からの授業開始で、これまたコピー屋さんなど、まだ開いていない。ということは、逆算して木曜日の午後には、金曜日の午後のハンド・アウトの印刷を済ませる必要があることになる。午前中のセンター開所時間に、事務仕事の合間を縫いながら、図書室開室時間を狙って下調べをし、その日の午後、シエスタで静まりかえった町をあとに大学寮に戻って、手書きのハンドアウトを準備する、というのが日課となった。だが、午後二時から実際には午後六時まで、大学の事務所のみならず、たいていの商店も閉まってしまうこの国では、せっかく用意したハンド・アウトの複写がとれない。

この青二才め、ハンド・アウトなどなしに授業くらいこなせ、といわれるかもしれないが、なにしろ相手は外国語には拒絶反応をしめす学生諸君である。最低限、スペイン語に訳した用語集を印刷したプリントを配らないことには、授業など不可能だ。おまけに、日本美術史、とりわけ仏教美術史というのは、いざ取り掛かってみると、すこぶるやっかい。弥勒菩薩だ阿弥陀如来だ、といった仏教用語のサンスクリット

標記をたちどころに諳じえる方が、はたして読者のなかにどのくらい居られるだろうか。いうまでもなく、こうした専門用語は、学生諸君にはまったくチンプンカンプン。法隆寺だ興福寺だ、といった名称を頭に入れるだけでも大変なのに、異教のヘンチクリンな名称がこうも続出しては、労多くしてかえって敬遠される、という悪循環は回避しがたい。

かてて加えて、最低限の教室の確保からして、スペイン式。当方が着任してから、センター長は、学生諸君の前で、問題があれば、すべて自分が解決するので、といった演説をなさったが、逆にいえば、当方が到着するまで、教室の手配すらできていなかった。矢島さんとの事前の電子メイルの遣り取りで、てっきり授業はセンターの教室でできるもの、と思っていたら、最初の説明会を除いて、次回からは、理学部の教室を間借りするとのこと。スライドとヴィデオ映写の便宜ある教室を、大学中から工面して下さったのはまことにありがたかったが、場所はセンターから歩いて十分強の、旧市街南西部の外れである。第一回目は参上してみると、センター長自らが、学生への事情説明にお出ましだったのには感心したが、残念ながら、案の定、教室が分かりにくくて、遅刻者続出。加えて、学生諸君の都合に配慮した分散授業のため、この初回の授業に出席したのは、登録学生の四分の一だけ。おまけに、翌々日の金曜日は理学部のお祭りだとかで、教室は閉鎖。実質第一回目の授業からして教室変更。臨時に日西センターと同居の国際語学コースの教室を借り受けた。ところが、当方は午後二時までの授業のつもりでいたのに、教室の使用許可は十二時までで、授業の最中に管理人がやってきて、授業を中止して退去せよ、といった騒ぎになった。これには、間に挟まった矢島さんが爆発。それやこれやで、矢島さんには、筆舌に尽くせぬご苦労をお掛けした。

毎回が多かれ少なかれこうした調子で、三回目にもなって初めて現れた学生が、教室が分からなくて苦労した、不利益をどうにかしろ、と当方に談判する有り様だし、ようやく軌道に乗ったと思った矢先、金曜日の夕方のセンターでの授業は、十二月に入るや、講堂を外部に貸したので、予定の（当方は思い込んでいた）日本文化紹介ヴィデオ映写は突如中止、当方もまたぞろ新しい教室探しを、授業実施予定の週になって模索する羽目となる。これでは学生諸君にたいして、きちんと毎回出席してくれ、などと頼むのが無理というものだろう。いろいろな事務の都合もあって、当方の授業予定掲示は、大学のホームページへの掲載が、暗証番号の確保が無

理なため、不可能。そもそも学生諸君は電子情報などまったく見ていないし、センターでも掲示板に授業場所の変更を掲示することひとつが、秘書や守衛を巻き込み大騒ぎ。掲示板の場所が分からない学生には、もちろん教室変更を伝える術もない。ましてや理学部の教室には、教室変更の掲示が出せない。ほとんど嫌がらせをして、出席を拒んでいるに等しい状況。そこで出来する学生諸君の文句への対応も、当方の仕事となる。

まあ、ざっとこうした物理的状況なので、そのうえの形而上学的な授業の中身にまで舞い上がるのは、至難の技。といってよいが、事の順番として、授業の内容を述べておこう。到着してみると、日本美術史概説を要求されていたことが判明したため、急遽予定を変更して、以下のような四つの講義を並列し、学生諸君には、単位取得のためには、そのうち三以上を選択せよ、と（事務規程上）説明することとした。その四つの授業の概要は以下のとおり。

● 水曜日夕方（19:00－21:00）セミナーA：
日欧文化交流史

十一月十三日：日本文化史概論：編年と代表作
十一月二十日：日欧文化交渉史における透視図法の変貌
十一月二七日：欧米における北斎評価の確立とその背景
一二月　四日：エドゥアール・マネ――スペイン趣味と日本趣味のあいだで
一二月十一日：フィンセント・ファン・ゴッホと日本、中国
一二月十八日：ポール・ゴーガン、未開主義、装飾芸術と日本

＊これにはスライド二台併用を計画していたが、最初の二週間は、日本からの郵便荷物がマドリッドの税関で引っ掛かって到着せず、予定変更を余儀なくされた。また二台のプロジェクターを使用可能の状態に設営するだけで（やれ延長コードがなかったり、電源が不明だったり、器具が不調だったりと）、半時間を要する。また、授業後の撤去にも一〇分はかかる。教室使用の制限時間もあって、毎回授業後は、大慌てで撤収せねばならず、学生諸君の個別質問にも十分には対応できない、というお粗末かつ血圧に悪い状況の繰り返しだった。

● 木曜日夕方（19：00－21：00）セミナーB：
近代の創出としての日本の美学的伝統
十一月十四日：昨今の日本美術史をめぐる論争への批判的導入
十一月二一日：浮世絵の伝統と木彫・刷りの技術の現在
十一月二八日：仏教隆盛：近代における創出としての古代東洋美術史
十二月　五日：雅び、あるいは王朝宮廷文化と近代日本の国民・国家意識
十二月十二日：詫び・寂び、禅：中世禅仏教思想と近代の東洋趣味信仰
十二月十九日：西欧の衝撃への反応と近代日本美術：ポスト・モダニズムへ

＊こちらは、教室使用に版権上問題のない市販のヴィデオを、当方の派遣教材費用の範囲内で購入し、使う予定でいたが、派遣に先立って実際に注文してみると、分売不可との報告にスペイン到着後に接することとなった。揃いの発注では当方の予算を越えてしまうため、予定していたヴィデオ活用は諦めるほかなかった。日西センターにあったヴィデオで応急手当をしたが、英語だと思って映写してみると日本語だったりして、その場で大慌てで英語解説をでっちあげる羽目となる。なにしろ準備にヴィデオの下見をする場所も時間もないため、題名だけを頼りに、教室でぶっつけ本番で上映してみて、その場で適当に解説を捻り出すよりほかに、手立てがなかった。だが漆をラッカーといっても首を傾げるばかりの学生諸君相手では、伝統手工芸の技法説明など、どこまで通じたのか、いささか心もとない。

● 金曜日日中（9：00－10：00）
学生個別指導（個人別のアポイントメント）
（10：00－14：00）集中講義：
現代日本視覚文化論
十一月　八日：ユートピアからデストピアへ：総論的導入
十一月十五日：崇り、葛藤そして妥協：近代の寓意――『もののけ姫』の世界
十一月二二日：戦後日本の田園空間と森の霊の命運：『隣のトトロ』
十一月二七日：廃墟としての未来と超人的能力の蹉跌：『アキラ』とは何か
十二月十三日：汚染のうちに生きる：『風の谷のナウシカ』への旅
十二月二十日：重力に抗して：『天空の城　ラピュタ』の想像力

お勧めとして『チヒロの旅』（――と題して現地でちょうど映画館吹き替え上映中だった。）

＊これは学生諸君の要望を入れて現地で発明した授業。宮崎アニメのいくつかや『アキラ』はスペイン語でもソフトが入手可能で、すでに劇場公開で見ていた学生も多かったので、これを議論の材料とした。実際、学生諸君は、アニメ以外の日本知識は皆無に等しかった。ホクサイくらい知っているかと思ったら、そんな名前は聞いたことがない、という。こんな学生諸君相手では、美術史概論など不可能、と悟っての苦肉の策。ただし教室でのヴィデオ映写は法律違反となるので、ヴィデオ・ソフトは事前に各自で鑑賞できるように手配し、それに基づいて教室で討論を試みた。幸い『アキラ』、『ナウシカ』、『ラピュタ』などに関しては、当方に既に発表した英語論文があり、学会発表用のスライドも偶然当地に持参していたので、これを流用することで、なんとか毎週の授業を凌いだ、というのが、正直なところである。

● 金曜日夕方（19：00－21：00）セミナーC：
現代日本社会映像への批判的導入
十一月　八日：都市文化、娯楽、建築、農業、漁業、手工業
十一月十五日：工業と経済：財政、物産、商業、技術革新、無汚染発電
十一月二二日：政治・社会：皇室、国際貢献、政治制度、防衛、警察制度、運輸
十一月二七日：教育、医療・社会保障、環境保全、地域共同体活動、日本人像
十二月十三日：「技術立国日本」をめぐって［教室変更］
十二月二十日：スペイン人の描く日本像の未来は？（総合討論）［教室変更］

＊日西センターで毎週金曜日の夕方から矢島氏が担当で、外務省監修の一般公開用『ヴィデオ日本百科』（スペイン語）というものの市民向き映写がなされていたので、これ幸いと相乗りさせて戴いた。学生諸君と鑑賞したあと、場所を移してその内容を批判的に検討し、討論を試みた。ただし、このヴィデオは一九九三年作成のため、多くの分野で情報があまりに古くなっている。画面に登場する銀行は今やほとんど存

在しないし、電子機器などの最新情報は、スペインでもすでに日常となっていて、携帯電話など、かえって古臭い。政治となっても、ご登場は村山首相にクリントン大統領では、歴史映像を眺める感覚である。食肉流通から原子力発電、警察組織から政府開発援助、外務省の活動に至るまで、無謬かつ効率的で健全な国、日本という自己イメージは、まるでその後のバブル崩壊と度重なるスキャンダルを予知する能力を自ら封殺してきた日本社会の抑圧構造を地で行く編集態度を見せつけられたような、薄気味悪ささえ覚えさせられる。言い換えればそれくらい反面教師として、いまや歴史的にもじつに貴重なヴィデオなのだが、学生諸君からは、説明が一面的で上滑り、その後の最新情報が編集されていないのは、日本の対外的怠慢、と鋭い批判が相次いだ。まことにごもっともな批判なので、平凡社から発刊されている海外向け日本情報誌『にっぽにあ』(英語版、スペイン語版)を、在スペイン日本大使館および国際交流基金の計らいで急遽必要部数購入していただき、この雑誌の記事を最新情報の補助教材として併用した。ただこの夕刻の学生の大多数は、英語をまったく理解しないため、通訳可能な学生が都合つかず欠席の日には、意志疎通に甚大なる障害を経験した。あたりまえだが、スペインで学部の授業を外国語でやるのには、しょせん無理がある。当方がつけ刃では、かえって学生諸君に迷惑がかかることも、言うまでもない。

多少なりとも想像力のおありの読者なら、容易にご理解いただけるかと思うが、これだけの講義を、午後二時から六時までは事実上機能停止となってしまうスペイン社会で、映像資料をも動員して、しかもスペイン語に不自由このうえない講師が、独力で二カ月にわたって提供し続ける、というのは、はっきり申しあげて、ほぼ不可能に属することである。そもそも授業直前にようやくできたスペイン語併用のハンド・アウトを、必要部数コピーしようと思って町に出ると、その夕刻に限って、お得意のコピー屋さんが、何かの都合で閉店していたり、信頼していた大学のコピー・センターが、祝日の前日ということで、規定に従って早めに閉まっていたり、また学生の誰も何だかきちんと説明できなかった休日のために、準備しておいたスライドの現像ができなくなったり、そもそもそのスライドの撮影を予定していた、日西センターの図書室が、突如組合の規定に従った司書の休暇で閉鎖されてみたり、センターの都合で部外者の会議に貸しだし

たために、使用不能になったり――といった、当日になって行ってみないとわからない突発的変更と、例外のほうが多い(これはラテン系の国々では慣れっこだが)運用の御蔭で、要するに予定をたてて何かを準備することなど、まるっきしできないのである。

という次第で、いくらまじめに準備をしたところで、それが授業で実現できる可能性は半分もない、と最初から諦めつつ、しかしそうした突発事態が生じても、二時間(あるいは四時間)の授業は何とか持たさねばならず、またたまたま英語に堪能な気のいい有能な学生が出席して、一部通訳の労を取ってくれた日はよいとして、そうした手助けのない日には、まったく外国語を理解しない学生を相手に、カタコトのスペイン語から、学生に笑われるイタリア語から、拒絶される英独仏語に至るまでを、なんとか騙しながら使って、意志疎通を図る羽目となる。学生たちが同情して協力してくれる日はよいが、先方もいつでもご機嫌とは限らない。第一回目には途中で何人かの猛者の男子学生や、内気な女子学生たちが退席してしまって、どうにも教室の士気が萎えてしまったのは、否定し難い。結局、当初登録していた五十名を越す学生のうち、第二週以降も生き残って最後まで熱心に付き合ってくれたのは半数の二十五名。逆に四週間目を過ぎたころから、単位習得が容易と見てか闖入を始めた学生などもあって、支離滅裂。

こうした事情だから、毎回の授業に、分かりやすい質問票を準備して、この毎回の提出とその内容によって評点を決定するむね、毎週新顔や欠席者がいるため、しつこく説明を繰り返した。ちゃんと提出してくれる二十五名は、顔と名前も記憶できた。だが、それ以外に、最後のころになって、そんなこと承知していなかった、単位をどうにか工面してほしいなどという欠席学生が続々と現れて、あたかも自由選択単位救済部隊のような有り様となった。当方帰国後に文句がセンター長相手に舞い込むのも困るし、かといって出席の事実のない学生に、四・五単位の認定など、してしまえば、こちらの信用を失うことにもなりかねぬ。といって、下手に撃墜王を演じてしまっては、当方の存在意義に疑問符がつくばかりか、そもそも来年度から予定されている東アジア文化専修の創設の必要性までが、危うくなりかねぬ。

読者のなかには、なにをおおげさな、という反応をおもちのかたも多いだろう。もとより国内での教授義務も軽微だ

から、特権として海外で教鞭を取っていながら、その特権に甘んじて気楽な文句ばっかり連ねているのは、まことにもって怪しからん、というご批判は、甘受するほかないだろう。そもそもスペイン語での教授能力失格の自覚がありながら、このような責務を引き受けた、筆者当人の責任こそが問われるべきだろう。だがそもそも日本時間では本年度になってから持ち上がった出講依頼にたいしてなど、日本の大学では通常、とても対応できるはずがない。来年度からの開講予定の新専修に関しても、目下これと同様な事態が進行中で、およそ日本から日本人講師で新規採用の非常勤講師を探すなら、前年の十二月以前には交渉契約ができていなくては、到底無理ですよ、という最低条件をスペイン側に伝えるくらいしか、当方にできることはないのだが、目下そうした情報を先方に伝えるべき通路そのものが確保されないまま、十二月の第一週を終えようとしている。

先週日本出張だったセンター長にたいして、国際交流基金の当方派遣の書類上の責任者たる鈴木雅之さんが、東京でいろいろ説明して下さり、やっと大学当事者との面会が実現しそうな雲行きではあるのだが、なにしろちょうどサラマンカ大学側は、これまで日本との交流に熱心だった学長の第三期目の選挙が差し迫っていて、この選挙の結果を見ないことには、サラマンカ大学側の東アジア文化専修の取り組みの先行きも明確とはならない恨みがある。加えて、専修が文献学部に創設されるとなれば、学部長（日本学科創設に関する学長の率先に批判的）や教務委員長（これは副学長格）とセンター長との関係にも影響がでるし、そもそも専修の責任者となるべき人選が未定とあっては、当方が助言すべき当事者がなお存在しない次第であって、これでは新専修導入に関する助言をなすことを業務とされている当方は、いったい誰にたいして何をすれば義務を果たしたこととなるのか、皆目不明の態。

不明といえば、まず、サラマンカ日西センターというものの、位置付けがいまだによくわからない。サラマンカ大学に属した機関である以上、その運営に、スペイン側の所長が大きな権限を握っているのは当然だが、運営を見ていて、日本とスペインの文化交流とは無縁の貸し会場となっている場合があまりに多い。なにも筆者は国粋主義的に、日本関係の行事にのみこの施設を使え、といっているわけではない。だが大学の労働組合の都合とやらで図書館の司書が三カ月に一度は交替し、日本語図書の管理など無理な司書の個人的な都合で開室時間が恣意的に左右されるのは問題だろう（これは近々、改善される見込みとのこと）。

またさまざまな催し物も、日本サラマンカ大学友の会が持ち込んだ企画を別とすれば、予算的に外部が負担するなら会場を外部の企画に賃借する――というのが、目下の対応となっている。それが文化振興に益する限りで取り立てて異論を差し挟もうとは思わないが、せっかくの日本文化史関係の展覧会があっても、オープニング・パーティーひとつ開けず、講演会も実施されず、また現地スタッフの創意工夫による企画も、せっかくの熱心な参加者の意欲を必ずしも受け止められぬままに終っている（例えば、好評だった『ヴィデオ日本百科』の放映は、センターの都合で、一二月は急に打ち切り）。現地スタッフが献身的で、現地の事情に詳しい方たちであるだけに、こうした運営状況では、あまりにもったいない、との感想を禁じ得ない。事業費を恒常的に、とまでは申さないが、現地の意欲を、いますこし容易に「かたち」にするための手段や補助が講じられないものだろうか。

現地の大学の施設発足の基礎を、日本企業および外務省OBの関係者が、日本サラマンカ大学友の会という組織を作り、いわば好意として財政的に援助した、という事業の善意は疑えない。だが実際の運営となった場合の、サラマンカ大学と日本側との関係、あるいは文化事業にかんする国際交流基金の関与の形態が、なお事務手続きのうえで煮詰まっていない、との印象を筆者は抱いた。あるいはまったくの誤解かもしれないが、類似の国際協力の例に照らして、将来の健全な発展への指針を示す義務は、日本側にも求められている、というのが、筆者の感触である。（これは、日本サラマンカ大学友の会による派遣ではなく、あくまで国際交流基金による授業担当という名目で派遣された当方の立場ゆえの、偏見かもしれない。もし当方の状況判断に誤解があれば、ぜひとも関係識者によるご訂正を願いたい）。

英語に堪能なロペス現センター長の任命ひとつとっても、現学長の、スペインと日本との学術、文化交流への意欲の現れとして、これを肯定的に評価すべきところだろう。また、神道思想を中心に、日本文化研究に深い学識を有するファレーロ特任講師がセンターに所属しておられるのも、大きな利点である。秘書のエレーナさん、守衛のホセさんも、業務熱心で、人間関係も（まずは）うまくいっている。また林屋元大使のたっての要望で、商社退職後着任し、センター旗揚げから現地の運営まで、まことに献身的に努力されている矢

島信夫・現地職員ご夫妻の、余人をもっては代え難いご活躍とご苦労には、傍で見ていても頭が下がる。まことに不適格な人間が派遣されたために、法外なご迷惑をおかけしたことを、ここに一言お詫びしたい。

そのうえで最後にひとこと提言めいたことを述べて、締めくくりとしたい。センターおよび新専修の運営には、専門知識をもった積極的なスペイン側コーディネーター、また教授陣を支援する日本側からの経験豊かな日本学者、および若手で意欲溢れる教育者の建設的な関与が、是非とも必要だろう。あえて「日本学者」と断ったのは、当地で要求される、国際的な教育・研究能力が、日本における国語・国文学、国史学といった、特定の学問領域内部において要求される学識には収斂しないものだからである。また外国人を対象とした日本語教育担当者でも、スペイン語に堪能なことは不可欠の条件だろう。スペイン研究者として現地で通用し、かつ欧州の日本学関連学会でも評価されるだけの力量が、最低条件となるだろう。サラマンカのみならず、マドリッド自由大学およびバルセロナ自由大学にも東アジア専修の創設が予定されている。いずれもスペインと日本との将来にわたる文化交流・人材育成の橋架けとして、適切な有識者の参画により、今後数年間のうちに新専修運営の機軸が確立し、前向きな将来像が培われてゆくことを強く願って止まない。

サラマンカにて　西暦二〇〇二年一二月八日

日文研　二十九号

平成一五年三月三一日発行

編　集　光　田　和　伸

発　行　国際日本文化研究センター

住所　〒610-1192　京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話　（〇七五）三三五―二二二二

ホームページ　http://www.nichibun.ac.jp

印刷　中西印刷株式会社